原爆投下以前の長崎医科大学附属図書館

松村　悠子*
長崎大学附属図書館

Ⅰ．はじめに

長崎大学医学部の前身である官立長崎医科大学は長崎市坂本町に所在していた。同地は昭和20（1945）年8月9日に原子爆弾が投下された爆心地から1キロメートル圏内にあり，原子爆災によって医科大学本部および附属病院は壊滅的な被害を受けた。附属図書館も例外ではなく，図書館の建物はもちろん所蔵資料もほとんどが灰となった。

長崎医科大学附属図書館（以下，附属図書館）は，戦後に長崎医科大学が長崎大学医学部となったのと同時に長崎大学附属図書館の分館となり，現在の長崎大学附属図書館医学分館（以下，医学分館）につながっているが，原子爆災により大学はもとより附属図書館で所蔵していた図書や学術雑誌，事務文書はほとんど消失している。そのため長崎大学附属図書館には附属図書館時代についての資料が非常に少なく，『図書館概要』にも記述が乏しい。

そこで筆者は長崎大学には所蔵されていない史料を基に戦前の附属図書館の機構，人員，提供するサービスの様子を調査した。主に使用した史料は，『醫科大學附屬圖書館統計』（以下『統計』）および『長崎医科大学一覧』（以下『一覧』）である。この2点はともに医学分館にはほとんど所蔵がなく，国立国会図書館による近代デジタルライブラリー（http://kindai.ndl.go.jp/）で無料公開されているものを使用した。近代デジタルライブラリーの欠号分は他大学図書館に所蔵があったため相互貸借で取り寄せを行った。

Ⅱ．官立長崎医科大学附属図書館以前

前述の通り，原子爆災により戦前の長崎医科大学に関する史料で現存するものは非常に少なく，同学の歴史をたどるには中西啓による『長崎医学百年史』（以下『百年史』）[1] が最も詳しい。『百年史』に「図書館」の語が初めて出現するのは大正時代の官立長崎医科大学時代からであるが，同学の歴史は安政4（1857）年にオランダ海軍医であったポンペ＝ファン＝メールデルフォールトが医学伝習をはじめたことにさかのぼることができる。そこで，官立長崎医大以前に図書館的機能を持つ部署ないし施設があったかどうかという点について整理する。

その前に，日本における近代的図書館の起源について触れておく。明治32（1899）年11月に図書館令が公布され，地方自治体や諸学校に「図書館」を設置することが認められるようになった。しかし東京帝国大学は明治10（1877）年に，京都帝国大学は明治30（1897）年にそれぞれ附属図書館を設置しているとおり，実際は「図書館令」以前より近代的図書館は存在していた。長崎県内では明治40（1907）年から長崎大学経済学部の前身である長崎高等商業学校にも図書閲覧室が運営されており[2]，明治42（1909）年には県立長崎図書館が創立された。

では官立長崎医科大学の前身である長崎医学専門学校（明治34（1901）～大正12（1923）年）はどうであったのか。明治34年に第五高等学校医学部から名称を変更した長崎医学専門学校（以下，長崎医専）には「図書室」があったことが複数の史料から確認できる。

まず，『長崎医学専門学校一覧．明治38－40年』（以下，『長崎医専一覧』）には図書に関する規定が以下の通り記載されている[3]。

第九章　図書閲覧
第一條　本校所蔵ノ図書ヲ閲覧セシムル為メ図書閲覧室ヲ設ク
第二條　図書閲覧室ハ休業日ヲ除ク外毎日之ヲ開ク
第十章　図書貸付
第一條　本校所蔵ノ教科用図書ハ生徒ノ願ニ依リ之ヲ貸付スルコトアルヘシ
第二條　前條ノ図書ハ学生課ノ承認ヲ得ルニアラサレハ之ヲ貸付セス
第三條　貸付ノ図書ハ毎学年末ニ於テ悉皆返納スヘシ但其期日ハ別ニ之ヲ定ム

*Yuko MATSUMURA：ヘルスサイエンス情報専門員（基礎）
〒852-8523 長崎県長崎市坂本1-12-4. （2013年5月28日　受理）

退学又ハ休学セントスルトキハ其出願前ニ之ヲ返納スヘシ

第四條　貸付ノ図書ハ他人ニ転貸スルコトヲ許サス

第五條　貸付ノ図書ヲ汚損若クハ紛失シタルトキハ該価額ノ幾分又ハ全額若クハ代品ヲ納付セシム

第六條　前各條ノ條規ニ違背シタル者ハ即時図書ヲ返納セシメ尚次学期間図書ノ貸付ヲ停止ス

これにより長崎医専には「図書閲覧室」があること，図書を管理し学生に貸出をしていること，貸出には学生課（大正11（1922）年は「教務課」）の承認が必要であることが分かる。

また，『長崎医専一覧』の「校務分掌規程」には「図書課」の業務内容について記述がある。

図書課ニ於テハ他ノ事業ヲ掌ル

一　図書ノ整理保存及出納ニ関スルコト

二　図書簿ヲ整頓スルコト

三　図書ノ購入及修理に関スルコト

四　図書ノ貸付ニ関スルコト

五　閲覧室ノ開閉及取締ニ関スルコト

六　此他図書ニ関スル事項

学生課とは別に図書課が存在し，図書の購入・整理・貸出，図書閲覧室の管理を担っていたことが分かる。図書課の名の通り，図書館業務のほとんどがこの課に集約されていた。

ただ，『長崎医専一覧』の「職員名簿」には，書記に「会計課主任兼図書課主任　江口兼三郎」，雇員に「図書課兼会計課　徳永博」と記載があり，図書課に専任の職員は配置されていなかった。更に図面によると，長崎医専本館の1階に入って右，会計課の隣に図書室及び図書課の記述がある。会計課の内部組織として図書課があったと考えられる（図1）。

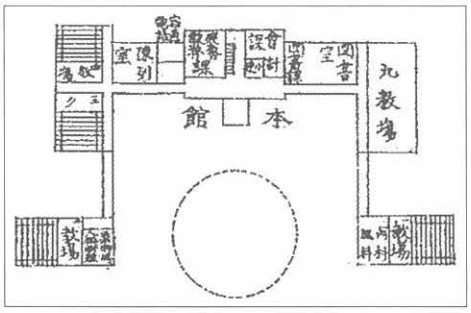

図1．長崎医学専門学校本館配置図
長崎医学専門学校一覧．明治38-40年より

次に，大正11年に発行された文部省による『全国図書館に関する調査1922年』には64の官公私立大学並びに学校附属図書館が収載されているが，その中に「長崎医学専門学校図書室」の名がある。それによれば図書室の設立年月は明治34年4月，大正10年度の経常費予算が総額・図書購入費共に4,067円，蔵書数が和漢書4,880冊，洋書6,014冊，1日平均閲覧人員は50人だったという[4]。

『日本図書館史並ニ関係事項年代記』の明治34年の項にも「長崎医専（今ノ長崎医大）図書室設立．大正14年蔵書111,000冊」とあり[5]，長崎医専では設立時より図書室および図書課によって図書館的機能を備えていたということが確認できる。

しかし，図書課主任を筆頭とした職員がほとんど会計課と兼務であること，館長に相当する人員も存在していないことを考慮すると，これを図書館であると明言してよいかは疑問である。

Ⅲ．官立長崎医科大学附属図書館の成立

前述の通り，長崎における医学教育の歴史上で「図書館」が出現したのは官立長崎医科大学になってからである。「図書館」の出現とは，単に長崎医専における図書閲覧室および図書課が名称を変更しただけではない。学内の規則，国による法的な設置義務，建物として独立した図書館の設置，館長職・司書の登場など，多方面にわたって医学専門学校時代とは異なる。

長崎医専が長崎医科大学となったのは大正12（1923）年の官立医科大学官制による。大正11年の勅令第百四十三号で新潟・岡山医科大学が，翌12年の勅令第九十三号で千葉・金沢・長崎医科大学が成立しており，いわゆる旧六医科大学と呼ばれる医科大学の内5大学がこのときに成立した（熊本医科大学は昭和4（1929）年に官立となっている）。

附属図書館は，長崎医専が医科大学へ昇格した大正12年から数年にわたって段階的に整備された。まず大正12年に長崎医科大学附属図書館規程が認可され，次に大正15（1926）年8月に附属図書館の新館が落成し独立した建物が整備された[1]。

大正15年9月7日には，館長および司書職の設置の根拠となる勅令第三〇二号が発令された。

勅令第三〇二号

官立医科大学官制中左ノ通改正ス

第二條中「書記」ヲ「書記司書」ニ改ム

第九條ノ二　司書ハ判任トス上官ノ命ヲ承ケ附属図書

館ニ於ケル図書記録ノ整理，保存及閲覧ニ関スル事務ニ従事ス

第二十二條　官立医科大学ニ附属図書館ヲ置ク図書館ニ図書館長ヲ置ク教授又ハ助教授ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス
図書館長ハ大学長ノ監督ノ下ニ於テ図書館ノ事務ヲ掌理ス

これにより，官立医科大学には附属図書館を設置すること，司書を設置すること，司書は図書の記録や整理・保存・閲覧業務を行うこと，図書館長を教授か助教授から設置することが法的に義務付けられた。『文部省職員録』によると，勅令第三〇二号以前は新潟・千葉医大では図書館，金沢医大では図書室がありそれぞれ館長や書記が配置されていたが，岡山・長崎医大では図書館（室）についての記載はない[6]。

また『一覧』においても，「自大正15年至昭和2年」より「図書館長」「司書」が登場している。図書館長および司書の配置については『百年史』にも，大正15年9月に附属図書館に新たに司書が置かれ，初代附属図書館長が任命されたこと，同30日に附属図書館規程が改正されたことが記載されている。

長崎医科大学附属図書館規程[7]

第一條　図書館ハ本学所属図書ノ管理ニ関スル事務ヲ掌リ又本学ニ委托セラレタル図書ヲ保管スル所トス

第二條　図書ノ出納ハ図書館係員之ヲ掌ル

第三條　教室其他ニ於テ図書ヲ備付クル場合ニハ当該教室又ハ其部ノ主任ヨリ定式ノ備付証書ヲ図書館長ニ差出スヘシ

第四條　各教室及其他ニ於テ備付ケタル図書ハ当該主任者其保管ノ責ニ任ス
図書館長ハ管理上必要ト認メタル時ハ係員ヲシテ前項ノ図書ヲ調査シ又ハ一時之カ還付ヲ求ムルコトヲ得

第五條　図書ヲ借受ケ携出シ得ルモノハ本学及附属専門部教授助教授講師及研究科学生ニ限ル

第六條　図書ノ貸出期間ヲ十四日以内トス

第七條　図書ヲ借受テ携出セント欲スルモノハ所定ノ用紙ニ記入スルコトヲ要ス

第八條　借受冊数ハ一名五冊ヲ超過スルコトヲ得ス
借用者ノ転任又ハ退職シタル者若は学生ノ休学，退学シタル者ハ直チニ其図書ヲ返納スヘシ

第九條　図書館ニ閲覧室ヲ設ケ各科共用ノ図書其他ヲ職員学生生徒ノ閲覧ニ供ス
閲覧ノ日時ハ随時之ヲ掲示ス

第十條　閲覧室ニ於テ図書ヲ借覧セント欲スル者ハ借覧票ニ記入シ係員ニ提出シ閲覧ヲ終リタル時ハ直チニ之ヲ返付スヘシ

第十一條　図書閲覧者ハ室内ニ於ケル掲示事項及係員ノ指揮ニ従フヘキモノトス

第十二條　本学職員及学生々徒以外ノ篤志研究者ニシテ図書ノ閲覧ヲ請フモノアルトキハ図書館長ニ於テ許可ヲ与フルコトアルヘシ

第十三條　諸官庁学校又ハ本学職員以外ノ者ヨリ図書借受ノ照会アリタル時ハ図書館長ニ於テ差支ナキモノト認メムル場合ニ限リ学長ノ承認ヲ経テ之ヲ許可スルコトヲ得
但其際所要ノ図書及借用期間（十四日以内）ヲ記入セル借用証書ヲ学長宛ニ提出セシムヘシ

第十四條　本学職員及学生生徒ニシテ貴重図書ヲ閲覧セントスル時ハ書名及閲覧ノ理由ヲ詳記シタル願書ヲ以テ図書館長ノ許可ヲ経タル上閲覧ノ手続ヲナスヘシ
貴重図書ハ閲覧室以外ニ携出ヲ禁ス

第十五條　本学及附属薬学専門部教授助教授講師ニシテ特ニ書庫内ニ入リ図書ヲ検索セントスル者ハ掛員立会ノ上検索ヲナスヘシ

第十六條　図書ヲ紛失毀損又ハ汚染シタル者ハ同一図書ヲ以テ弁償セシム
但時宜ニヨリ代金ヲ以テ之ヲ弁償セシメ或ハ修繕費ヲ負担セシムルコトアルヘシ

第十七條　図書ノ定期検査ハ毎年一回七月一日ヨリ之ヲ行フモノトス

第十八條　本規定ニ違背シ又ハ室内ニ於ケル掲示事項ニ反シタルトキハ相当ノ処分ス

附則

第十九條　本規定ハ大正十五年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

長崎医専時代は図書課と学生課に分かれていた図書に関する業務が図書館に一元化されている。また，毎年の蔵書点検が追加されている。

また貸出冊数は5冊まで，貸出期間は当初10日間であったが大正15年には14日間となった。この5冊14日間は現在の医学分館と同じである。ただ，当時の他の医学図書館と同様に館外貸出は教授・助教授・講師・研究

科学生に限られていた。

閲覧日時は，大正12年の規程では平日および土曜の午前8時から午後9時までとなっていたが，大正15年には随時掲示すると変更されている。『統計』によると4月～7月20日および9～10月は午前8時から午後9時，7月21日～8月31日が午前8時から午後6時，11～3月が午前9時から午後9時と時期によって開館時間が前後していた。

Ⅳ．官立長崎医科大学附属図書館の職員・施設・資料

1．職員，特に初代司書山口林一

ここからは当時の館長を含めた人員についてまとめる。『統計』によれば，長崎医科大学附属図書館の職員数は館長を含めて5～9名で運用されていた。その職種は館長，司書兼書記，雇などである。現在の医学分館のスタッフが時間外勤務職員を除くと7名であるから，意外にも数字上は現代とあまり変わっていない。

館長は現在の医学分館と同様に教授の兼任であり，初代館長赤松宗二を含めて7名が館長を務めた。この7名の所属教室は，薬物学，生理学，病理学第一，解剖二，衛生学，薬理学，解剖一とすべて基礎医学系教室である。臨床系より基礎系出身の館長が多い点も現在の医学分館と同様である（**表1**）。

表1．歴代医科大学附属図書館館長

	任期	氏名	教室
1	大正15(1926)9.22－昭和4(1929)4.1	赤松　宗二	薬物学(薬理学)
2	昭和4(1929)4.1－昭和8(1933)4.1	緒方　大象	生理学
3	昭和8(1933)4.1－昭和12(1937)3.31	竹内　清	病理学第一
4	昭和12(1937)3.31－昭和15(1940)8.15	高木純五郎	解剖二
5	昭和15(1940)8.15－昭和18(1943)3.31	大倉　玄一	衛生学
6	昭和18(1943)3.31－昭和20(1945)3.10	寺坂　源雄	薬理学
7	昭和20(1945)3.10－昭和20(1945)8.9	池田　吉人	解剖一
8	昭和20(1945)8.－昭和22(1947)7.5	高瀬　清	精神科学
9	昭和22(1947)7.5－昭和23(1948)9.7	横尾　安夫	解剖二
10	昭和23(1948)9.7－昭和28(1953)4.30	頼尊　豊治	医化学(生化学)

『一覧』には館長以外にも司書兼書記・嘱託については氏名が掲載されている。司書兼書記は長崎医科大学附属図書館規程における図書館主任のことであり，現在の日本医学図書館協会における主任司書に相当するものと考えられる。司書兼書記の定員は1名であり，山口林一（大15～昭8），内田梅雄（昭9～10），石川敏雄（昭11～14），田鶴壽男（昭15～）と数年単位で職員が異動していた[8]。

その中でも初代司書である山口林一は明治17（1884）年7月20日に長崎の通訳・実業家である山口林三郎の息子として長崎に生まれ，大正4（1915）年に長崎医学専門学校図書課の雇員として採用されて以来，司書兼書記（大15－昭8），附属図書館嘱託（図書館主任，昭9－16）と26年間長崎医専および長崎医大の図書館で勤務していた。山口は昭和2（1927）年11月10日に発足した官立医科大学附属図書館協議会（現在の日本医学図書館協会）の創立メンバーの一人でもあり，昭和6（1931）年10月7～8日に長崎で第5回総会が開催された際にも司書であった[9]（**図2**）。

山口は郷土史にも関心があり，附属図書館勤務時代に長崎の郷土史誌である『長崎談叢』に数本の論文を寄稿している。定年まで附属図書館に勤めた訳ではなく，昭和17（1942）年に市制が開始された大村市役所へ異動し産業課長となった[10]。その後の山口の足取りは分からなかったが，四男の静夫が長崎医科大学附属図書館に勤務しており，原子爆災により死亡している[11]。

図2．初代司書山口林一
第5回医科大学附属図書館協議会（昭和6年，於長崎）
当時47歳。『日本医学図書館協会六十周年略史』より

2．施設

ここでは，『統計』『一覧』を中心に施設面での附属図書館について述べる。

『統計』によると，附属図書館の当初の建築費は20,931円91銭，設備費は1,688円であった。面積は当初書庫が延40坪，閲覧室が37坪，事務室が16坪であった。これが昭和6年に事務室が延32坪となり，増築された。昭和12年の『統計』では書庫の面積が2倍の80坪に拡大している。これは，新しく書庫が増築されたためである[12]。この新書庫は鉄筋コンクリート造りであり，旧書庫と共に原子爆災にも耐えた長崎医科大学キャンパス内でも数

少ない建物である。

この坪数を『一覧』の土地建物表と照合したところ，『一覧』における「図書室附属書庫」の坪数が書庫とほぼ一致しており，閲覧室および事務室等は書庫と隣接した「大講堂及図書室」内にあったことが推測できる。

その他の施設については高木館長在任期間中の昭和13年統計で館長室がなくなり，教員閲覧室が出現している。坪数が全く同じことから館長室がそのまま教員閲覧室になったと考えられるが，なぜ館長室がなくなったかは不明である。

3．資料

『統計』によると，長崎医科大学附属図書館は昭和16年に和洋合わせて70,000冊以上の蔵書を誇っていた。これは『統計』に参加していた15館の平均値56,651冊を上回っており，旧六医大の中では岡山医科大学附属図書館に次ぐ蔵書数だった。その内訳は，洋書が半分以上を占めているが，この傾向は『統計』に参加していた他の図書館も同様であることから，戦前の医学書は和漢書より洋書が多数であったことが推測できる（図3）。

実際にどのような図書を所蔵していたのかという点については，附属図書館の図書原簿自体が原子爆災により焼失しているためすべてを調査することは不可能である。

ただ和洋の学術雑誌に関しては医科大学附属図書館協議会が戦前に発行した『医科大学共同学術雑誌目録，医科大学附属図書館協議会』に，洋図書・洋雑誌に関しては戦後の『Union catalogue of foreign books in the libraries of Japan medical schools』に掲載されている。

和漢書に関しては，楢林時敏（鎮山）の『外科宗伝（紅夷外科宗傳）』を附属図書館で所蔵していた[13), 14)]。

『外科宗傳』以外にも，ケンペル（Kaempfer, Engelbert, 1651－1716）の『Amoenitatum exoticarum（廻国奇観）』や，モーニッケ（Otto Gottlieb J. Mohnike, 1814－1887）が日本にもたらした日本最古の聴診器を附属図書館で所蔵していたことが『Acta Medica Nagasakiensia』掲載の医学史関係論文より分かる[13)]。この3点を含めた古文書・軸物・古医書・小型の貴重物件など130点については，昭和20年5月ごろ現在の佐賀県鹿島市に疎開したため原子爆災の被害を免れた[15)－17)]。

長崎医大図書館所蔵の古文書，軸物，古医書，小型の貴重物件などは二十年五月頃一括して佐賀県鹿島町（現鹿島市）の学校（県立鹿島中学校と思われる）に疎開され，全学ほとんど灰燼に帰したなかで，これら長崎医学の伝統を示す医史学資料は大部分喪失を免れた[18)]。

この長崎医大図書館の資料が鹿島町のどこに疎開されたかは不明である。

また，疎開の対象とならなかったものの原子爆災後も生き残った資料も存在する。これらは瓦礫の中から1冊ずつ拾い上げられて，現在の医学分館事務室に保管している図書原簿に疎開先から引き揚げた資料と共に記録されている。この被爆した資料の中には，万延元（1860）年にポンペによってフランスから取り寄せられた紙製解剖模型（kunstlijk）がある。

そこでPompe v. M.はヨーロッパから解剖模型を取寄せるように直ちに手配した。フランス製のこの模型（Dr. Chazourによる）は，破損されるまで使い古した後，歴史的に価値がある遺産として今日なおわれわれの医科大学に大切に保存されている[13)]。

上記は昭和16（1941）年に高木純五郎附属図書館長（当時）が『Acta Medica Nagasakiensia』に発表したドイツ語論文の邦訳である。この紙製解剖模型は大正9（1920）年の時点で頭部・両腕・前半身・左脚部は失われていた[19)]（図4）。

これは疎開の対象ではなかったが，以下のような経緯

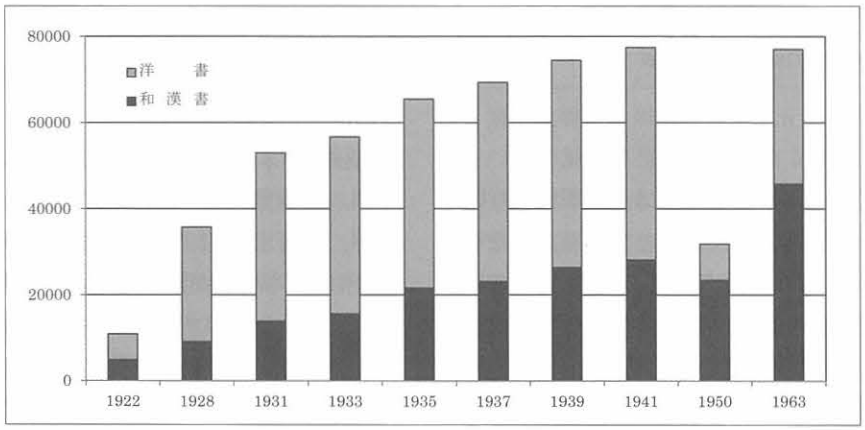

図3．長崎医専図書室，長崎医大附属図書館の蔵書数の変遷

図4. 大正9年当時の紙製解剖模型
長崎医学専門学校卒業アルバムより

により被爆しながらも残存した。

原爆の直前，佐藤純一郎助教授（当時）が，フトした予感で，これを図書館書庫の一つ（向って右，鉄筋コンクリートで左のものより新しく大きい）の二階に移したことがこれを救った[18]。

図書館書庫へ移動する以前は解剖学教室で保管されていたが，解剖学教室は原子爆災により全壊した。佐藤助教授が移動させていなければ，紙製模型も灰燼と化していた可能性は非常に高い。

このほか，附属図書館には長崎とも縁の深い孫文の親筆「一視同仁」の額が飾られていたがこちらは焼失している[20]。

V．おわりに

以上，原子爆弾投下以前の附属図書館について現存する史料からまとめたが，原子爆災による図書館の被害についても紹介する。

図書閲覧室および事務室は全焼し，勤務中であった職員6名は全員死亡。池田吉人館長は解剖学教室で被爆，死亡した[11), 21)]。

書庫の建物は残存したが，火災により蔵書はほとんど焼失し，昭和25年に戦後初めて参加した『統計』では，蔵書数が戦前の半分以下の30,000冊まで落ち込んでおり被害の甚大さをうかがうことができる。蔵書数が戦前の水準まで回復するには，戦後10年以上を経過した昭和38（1963）年まで待たなければならなかった。

施設についても，原子爆災後は医科大学本部の移転に伴い附属図書館も長崎市興善町や諫早市などを転々とした後，坂本キャンパスに帰還し旧附属図書館書庫，医学部基礎研究棟の2階でサービスを提供していた。独立した建物としての図書館が復活したのは戦後33年経った昭和53（1978）年である。

今回は医科大学時代から戦前までの図書館について調査したが，資料の疎開や山口林一のその後については不明な点も多く，引き続き調査を継続したい。

引用文献

1）長崎大学医学部編．長崎医学百年史．長崎：長崎大学医学部;1961.
2）喜多芳明．（旧）長崎高等商業学校図書館小史．図書館学．1972;20:35-9.
3）長崎医学専門学校一覧．明治38－40年．長崎：長崎医学専門学校;1912.
4）文部省．全国図書館に関する調査．大正10年3月現在．東京：日本図書館協会;1978.
5）藤野幸雄監修．日本図書館史年表．金沢：金沢文圃閣;2012.
6）文部省職員録大正14年10月1日．東京：文部省;1925.
7）長崎医科大学編．長崎医科大学一覧．自大正15至昭和2年．長崎：長崎医科大学;1927.
8）長崎医科大学編．長崎医科大学一覧．自大正12至13年．長崎：長崎医科大学;1924,p.59-61.
9）日本医学図書館協会将来計画委員会・協会史編纂部会編．日本医学図書館協会六十年史．東京：日本医学図書館協会;1987.
10）大衆人事録．第14版．近畿中国四国九州篇．東京：帝国秘密探偵社;1943.
11）山口絢子，生田照二．追憶．原爆被爆四十周年記念忘れな草．1985;7:81.
12）西日本図書館学会九州図書館史研究委員会．九州図書館史．福岡：千年書房;2000.
13）青木義勇．長崎医科大学諸教授の医学史と洋学伝来史に関する欧文論文．長崎談叢．1982;66:1-45.
14）Koyano K. Sur un livre de chirurgie nipponais du dix-huitieme siecle. Acta Medica Nagasakiensia. 1942;4(1):1-4.
15）青木義勇．長崎医科大学歴史散歩．昭六会回顧五十年．長崎：青木義勇;1981.p.178-85.
16）若原猛夫．原爆当時の病理学教室．追憶：長崎医科大学原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ．長崎：原爆十周年記念出版委員会;1955.p.39-44.
17）秦野滋．追憶．追憶：長崎医科大学原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ．長崎：原爆十周年記念出版委員会;1955.p.149-55.
18）青木義勇．長大医学部所蔵の木製古聴診器と紙製人体解剖模型．長崎談叢．1981;64輯別冊:16-28.
19）長崎医科大学卒業アルバム．長崎：長崎医科大学;1920.
20）葉国慶.原爆の犠牲となられた長崎医科大学の師友を偲んで．原爆復興50周年記念長崎医科大学原爆記録集．長崎：長崎大学医学部原爆復興五十周年医学同窓記念事業会;1996.p.30.
21）長崎大学医学部原爆復興五十周年医学同窓記念事業会編．忘れえぬ日長崎医科大学被爆50周年記念誌．長崎：長崎大学医学部原爆復興五十周年医学同窓記念事業会;1995.

Nagasaki Medical College Library before the Nagasaki Atomic Bombing

Yuko MATSUMURA

Nagasaki University Library. 1-12-4, Sakamoto, Nagasaki-city, Nagasaki 852-8523, Japan

Abstract: Because of the atomic bomb that was dropped on August 9, 1945, little information is available about the Nagasaki Medical College Library. The author researched the history of the library based on the annual report of the Nagasaki Medical College and other documentation. Statutes authorizing the Nagasaki Medical College Library were made in 1926, and the library building was completed in August of that year. On September 7, 1929, Imperial Ordinance No. 302 formed the posts of director and librarian. The maximum number of books that an individual could borrow from the library was 5, and the period was set at 14 days. The opening hours on weekdays and Saturday were basically from 8 a.m. to 9 p.m. but varied with the seasons. There were 5-9 staff members, including a director. The first librarian, Rin'ichi Yamaguchi, worked at the library for 26 years. His fourth son, Shinzo, also worked there but died during the bombing. The library had a reading room, an office, and 2 stack rooms. In 1941, it housed over 70,000 books, the majority of which originated from the West, as well as rare materials such as 'Koi Geka Soden' by Narabayashi, "Amoenitatum exoticarum" by Kaempfer, and a stethoscope and a Kunstlijk, each of which was brought to Japan for the first time by Mohnike and Pompe. However, all these items were destroyed by the atomic bomb of August 9, 1945, and all the staff members died. The director, Yoshindo Ikeda, died while in an anatomy classroom. The stacks survived the blast, but most of the books were lost because of fire.

Key words: history; medical library; Nagasaki Medical College

(*Igaku Toshokan*. 2013;60(3):250-256)